

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530878

研究課題名（和文） 保育者の成長プロセスにおけるモデリング効果を踏まえた現職教育システムの構築

研究課題名（英文） In-service training system based on the modeling effect in the ECEC teachers' development process

研究代表者

内藤 知美（NAITO TOMOMI）

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：10308330

研究成果の概要（和文）：

保育者が成長実感を伴う形での、保育者の資質向上に寄与する現職教育・研修について検討した。史的考察から、保育者像が「学び成長し続ける」保育者像へ転換し、その結果、現職教育・研修のあり方は、成長プロセスを可視化し、階層別課題を設定し、組織内の役割を強調し、ライフステージごとに偏りのない研修を強調する傾向が見られた。インタビュー、アンケートからは、保育者モデルの存在と受容的態度が保育者の成長を促す条件であり、先輩モデルを真似る機会の保障や保育の視野を広げる「振り返る協働者」の存在ならびに保育者の自己肯定感を高めながら保育実践を改善するコンサルテーションの必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of our study is to establish the ECEC teachers' in-service training system which contributes on improving their professional development, while they realize their own development process.

We obtained the following results: (1) According to historical approach, the image of ECEC teacher has changed to "the one who learns to grow". Then in-service training makes the development process visualized to define the levels of educational challenges. And in-service training emphasizes the organizational roles and life-stage training. (2) According to questionnaires and interviews, the existence of ECEC teachers' model and its acceptance of ECEC teachers, especially in their first stage, are effective factors of ECEC teachers' professional development.

Based on these findings, three factors are necessary; opportunities of learning from the model, collaborators who help ECEC teachers to widen their perspectives, and consultation to change the attitude towards their practice and to keep their self-affirmation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：幼児教育学、保育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：現職教育、保育者、成長プロセス

1. 研究開始当初の背景

1987年の教育職員養成協議会における「教員の資質能力の向上方策等について」の答申以降、教員の資質・能力の向上を図ることが教育の重要課題として提示された。政策では、2002年、文部科学省が、「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教諭のために—」（幼稚園の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書）において、養成・採用・現職の場の「円滑化」によって、保育者の長期的な成長をサポートすることを進言した。教育基本法の改正(2006)以降は、教員の資質向上の取り組みが顕著となった。研究では、主に小学校教員の職業発達を検討する秋田、佐藤、岩川（1991）らの研究に続いて、「熟達化」をキーワードとして、保育者の成長に着目した高濱（2001）など、保育者の成長プロセスへの関心が高まった。

保育者の成長は、「学び成長し続ける」保育者像の理念に基づき、保育者自身が、モチベーションをもって内面的成長を遂げることであり、そのことが保育の質向上に結びつくと思われている。

しかしながら、「学び成長し続ける」保育者像を前に、保育者が自ら成長を希求するための現職教育・研修のあり方については、依然、保育技術を中心に教授する内容にとどまっているといわざるを得ない。

2. 研究の目的

本研究は、現職保育者の声および現職保育者が成長実感を伴う形で、保育者の資質向上に寄与する現職教育・研修システムを構築することを目的とした。その際、保育者の成長プロセスにおけるモデリング効果、すなわち保育者が保育者として成長するプロセスにおいて、保育者が自身の専門性を高めるために、どのように保育者モデルを活用するのかに着目した。

3. 研究の方法

研究の方法としては次の3つの方法でおこなった。

- (1) 答申・行政政策、保育団体の立案による研修体系などの資料から、現職教育・研修の史的考察を行った。
- (2) アンケート・インタビュー調査から保育者の成長プロセスにおける葛藤やつまずきの内容、またその改善方法について検討した。
- (3) 園内研修・アクションリサーチ（以下ARと示す）に参加しつつ、モデリング効果およびコンサルテーション効果を検討した。

4. 研究成果

(1) 現職教育・研修の史的考察

現職教育に関する文献資料等を用いて、現職教育の史的考察を行った。また国内外の保

育の現職教育・研修の動向を整理した。

近年の動向として、「学び成長し続ける」保育者像への転換が起こり、その変化に即した現職教育・研修のニーズが高まっている。2000年代に入るとその対応策として、各保育団体が中心となり、現職教育・研修の体系化を進めた。その特色としては、保育者の成長プロセスを「俯瞰図」として示し、成長プロセスを可視化し成長への動機づけを行ったこと、保育者に階層別（段階別）成長課題を設定し、課題である保育に関する知識を量的に拡大することを現職教育の主眼としたこと、また組織内での役割やライフステージに偏りのない研修を受けることを求めたことである。

(2) 保育者の危機場面と対応

① ファーストステージクライシス

実際、保育者は新任、初任といった初期段階での離職が多く、「学び成長し続ける」保育者像とのかい離が見られる。保育者へのアンケート・インタビュー調査の結果、特に子どもが充実して遊ぶ姿の背景に、「計画」「見通し」「流れ」など、保育者の専門性が発揮できた場合は、保育の「面白さ」「充実感」を感じるが、そうではない新任・初任段階における保育者は、「ファーストステージクライシス」に陥る事が考えられた。新任・初任段階における教育・研修環境の質が、保育者の専門性の確立において重要な要因になることが示唆された。

新任、初任のインタビュー調査から、新任段階の保育者の特徴を次にまとめた。a) 保育技術の未熟さ、保護者対応や気になる子どもとの関わりの難しさ、全体を見られない難しさなどを感じることが多い。b) 保育者に向かないかもしれないという不安を抱きやすく、自己肯定感が低くなることがある。c) 子どもの気持ちの読み取りや保護者への対応が適切であったかなど、客観的に自己省察することの難しさがある。

また初任段階では次の特徴がみられる。a) 保育者としての役割意識が高まり、子どもとかわる楽しさや仕事への意欲・自信を感じる。b) 保育者としての役割を十分に果たしているか、子どもと保護者への対応が適切であったか、自らの力量に不安をもつ。c) 自身の保育に対する自信の揺らぎや自己肯定感もてず葛藤がある。

特にファーストステージクライシスに陥ることを避けるためには新任、初任段階の保育者が自己肯定感を高めることが重要である。

またファーストステージクライシスに陥りやすい要因として、養成段階の実習体験の質に着目した。すなわち現職者のモデルとなる実習先指導教員・保育者が、学生および子

どもに対する受容的態度をもっているか否かが、実習生の「保育者イメージ」を規定する要因となることが明らかになった。

②モデリングの必要性

次に保育の実践場面に即して、新任・初任教員が保育に葛藤や困難さを感じる状況を取り上げ、どのようにその対応・改善を試みるかを検討した。ここではその一例として、絵本の読み聞かせ場面について言及する。

2012年にK県私立幼稚園の新任保育者を対象としたアンケート調査（*有効回答数 120、そのうちの自由記述項目を行単位で分析）によると、絵本読み聞かせ場面で困難を感じていることは表1のとおりである。また保育者がその困難な状況に、いかに対応するかを示したものが図1である。

表1. 読み聞かせ場面で困難さを感じていること

内容	件数
絵本の選択	28
年齢にふさわしい絵本、異年齢児の絵本、行事・季節、子どもが楽しめる絵本の選択	
読み聞かせ技術の不足	75
・導入の仕方	8
・声色の使い方、バリエーションがない	28
・声の大きさやスピード、間、リズムカルな場面の読み方、強弱	17
・絵本の終わり方	18
・絵本の世界に入る読み方	4
子どもへの声かけ、やり取りの方法	50
・集中しない子どもとその声かけ	21
・読み聞かせ中の子どもの反応・言葉の受け止め方	29
絵本の世界が子どもに伝わっているか、理解できているのか不安	6

「子どものペースではなく、自分のペースで進めてしまう」、「子どもの反応に対応しきれない」、「23人分の反応に対応できず、アタフタしている」などの自由記述に示されたように、知識・技術の不足を感じながら、一人ひとりの子どもの違いを前にし、クラス全員をどうまとめるかで困難さを感じている。すなわち絵本の技術・知識に加えて、集団を意識しながら一人ひとりの子どもに関わることの困難さを抱えている。

図1. 困難な状況に対する改善方法

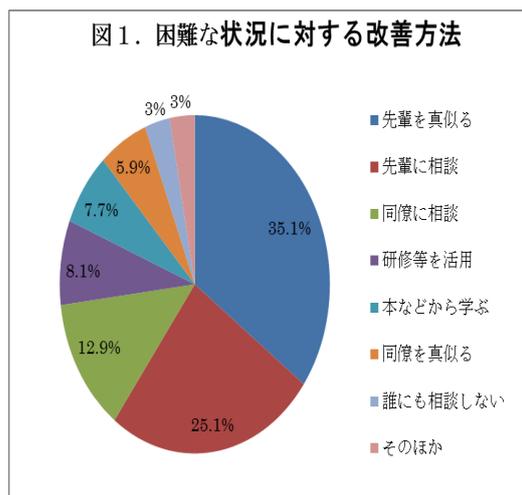


図1は、改善の方法を示したものである。困難な状況を改善するために先輩保育者をモデルとすることが多いが、その際、「先輩保育者を真似る」などの間接的方法をとることが多い。また「自分自身の自助努力」によって改善をはかろうとする傾向がある。結果、保育者は閉ざされた環境に陥ることが多く、保育者としての危機を抱えることが理解できた。自由記述の中には、「先輩保育者を真似たいが、通常の保育中は先輩の姿をみるができない」という意見もあった。

(3) 振り返る協働者ならびにコンサルテーション

保育実践におけるモデルとともに、保育者にとって「振り返る協働者」ならびにコンサルテーションが有効であることが示された。振り返る協働者の基本姿勢を以下のように整理した。

①「振り返り」の専門的理解者として

・振り返りが単純な反省的思考を促すのではなく、PDCAサイクルのもとで実践者が自身の保育の特徴を見出し、自己を評価し、良い所や改善すべき所を発見することを目的としていることを、明確に理解していること。

②保育実践や保育者、子どもなどの現象や関係性を読む専門的理解者として

・協働者は、実践のコンサルテーションに精通している人が望ましい。コンサルテーションは、実践者の意図を専門的に読み取る力が求められる。しかし、無意識に存在する実践者の保育観をあからさまに指摘するのではなく、意識を引き出すプロンプターとして存在する。

③保育実践の共感的研究者として

・実践を共感的に捉える理解者として存在する。

・保育実践に直接には関与しないが、保育の場に責任を持ち、その場に対する具体的な改良の手だてを共に考え、実践者に近づく姿勢

を持つ。

・振り返りの協働者は、実践を対象化し分析をすることが重要である。実践者と一緒に実践や保育を改善するための研究方法をとともに作り上げることを意識する。

・現場の保育改善を目的にする場合、保育実践者が研究者としての専門的視点を身につけることも目的とする。

④実践者の見えない問題や課題が「見えるように」可視化を促す

・実践者が見いだせない困難な方法を明らかにしていくためのプロセスを重視する。当事者には気づかない現象を、的確に見出す援助を行うことが求められる。またその振り返りに共感的に関与するが、保育の当事者的視点ではなく第三者的視点を持ち、保育研究に携わることが望まれる。

・実践者の主観的内観、オリジナリティーの尊重と、保育スキルや専門性を高めるためにコンサルテーションをしていく。

(4)事例 (AR) 研究の一例：T 教諭の専門性の向上を目的とした研修方法

①研究の経過

保育者 T は、保育歴 7 年目にして初めて 3 歳児の担任となった。このクラスは 2 歳児からの持ち上がりであり、“集団になじめない子・行動が気になる子”が進級。対応への不安を強く抱いていた。保育室の移動や新入園児 8 名の入園により、保育環境が一変。発達の後退に気づき、保育者自身の指導方法や声かけに問題があるのではないかと疑問に感じる。研修や他クラスの保育参観を通じ、むしろ自分の保育に自信が持てない自分に気づいたとし相談を持ちかけてきた。「振り返る協働者とともにおこなう AR」の趣旨に賛同し、研究を開始した。振り返る協働者は、小泉（研究分担者）である。

②振り返りの事例

1) 振り返る協働者と共に行う AR の手続き

a) 保育者 T が受け持つクラスで、日々の保育の様子をビデオ及び音声で記録をとる。

b) データである保育ビデオを保育者 T は視聴しながら、保育の振り返りを行っていく。そのときプロンプターである小泉は、T の保育の特徴を確認したり、保育行為の意味づけを質問しながら、保育者 T の保育観を明らかにしていく援助をする。AR は、2 週間に 1 回行われ、時間はおおむね 1 時間である。期間は平成 22 年 4～7 月までの 4 ヶ月間である。

2) 振り返る協働者と共に AR の効果-保育者の資質向上への寄与-

本研究の効果を、保育者 T の次の省察文から明らかにした。

事例 1（*下線は論文執筆者）

<保育者>

本研究を始め、クラス内の様子を撮影してみると、様々なものが見えてきた。具体的には自閉症スペクトラム傾向にある S くん の行動だ。S くんは認定こそおいていないものの、他児と比べ食事・排泄・睡眠など生活のほぼ全てに渡り、保育者の個別の声かけや対応を必要としている。S くん に個別の対応を行っている自分の姿をふり返る中で見えてきたものは、担任である保育者の保育観と、S 君へのより具体的な援助方法である。保育者として S くん に関わる中で他児との差を“なんとなく”認識していた部分がプロンプターと話し合い、振り返る中で S くんが他児と遊びを共有できない点や、彼の発話を再検討することで、生活全般においての彼のこだわりや疑問が見えてきた。この、一つひとつはとても小さなものである場合が多いが、彼のこだわりや疑問を保育者自身が認識・理解することでスムーズに生活を進めることができるようになる場面が見られた。S くん についての振り返りを進める中で、3 歳児クラスの年間カリキュラムと S くん の現状間にその差を感じ、個人年間カリキュラムを作成し、S くん に合った対応を目指すことができるようになった。また、S くん の対応だけでなく情緒の安定しない A ちゃん に関して、自身の保育観やクラス運営のポイントとして重要視している事柄を具体的に認識することができた。

・（中略）・ 4 月当初、保育者の対応や指示では行動できないこともあった S くんが、保育者の対応変化によって行動に移せるようになる等、振り返ることで得ることができた収穫もあるものの、S くん の成長に伴い こだわりや執着が強くなり更なる支援が必要となってきた。日々めまぐるしく状況が変化していく保育の現場において、保育者は子どもの安全、行動を把握しなければならない。日誌や個人記録などで反省を行うが、自身の行動を客観的な視点を設けて振り返る機会 はなかなか作れないのが現状でもある。しかし、第三者を交えた振り返りは、保育に夢中になるあまり狭くなりがちな保育者の視野を全く別の目線で広げてくれる有効な手段であると感じた。保育者の成長と保育改善は現場の保育者にとって大変重要である。

AR の検討からは、保育者が専門的な資質の向上を願ってやまない状況であっても、自分一人では振り返る視点に偏りがあること、またその偏向がむしろ保育者自身の苦慮する一因であることが示唆された。

(5) 求められる現職教育・研修と提案

最後に、上記の結果に、現職教育・研修を積極的に推進している園のインタビュー調

や情報提供された資料を加えて、現職教育・研修システムについての提案を記した。

① 保育者が学び成長しつづけるためには、モデルの役割が重要である。またモデルが受容的な態度で関わることで、目標とする保育者像が明確となる。保育者は危機や困難な状況にある時に、主に先輩保育者から学ぶとする。特に、新任・初任段階においてはその傾向が顕著である。そのため、先輩保育者の保育を見る機会を園内で確保する。園長・施設長が中堅保育者を専門性の高い保育者モデルとして積極的に活用することも保育者の成長に有効である。

② ファーストステージの保育者は、保育の知識・技術の不足に起因して、専門家としての意識や自己肯定感が低い。そのため同段階の教育・研修としては、「保育者である」という自信を高める内容、すなわち知識と実践が連動し、専門性の獲得ができた保育者自身が認識しやすい科目を意識して設定する。「子どもの安全や保健」に関わる研修などは有効である。

③ 保育者が実践を学ぶ上で、「真似る」という方法をとる場合が多いことを指摘した。学びの質を変化させるために、保育や子どもの発達について、積極的に「言語化」する機会を増やす。

④ 振り返る協働者の活用や保育者の自己肯定感を高めるコンサルテーションを研修に取り入れる。その際、講師は、保育の場を共有し継続性をもって関わり、保育者のニーズである「現場にそった内容」「具体的で実践に生かせる内容」「自身の保育の振り返り、見直し、確認ができる内容」を含んだ、現場型コンサルテーションを行うことが重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

①井戸ゆかり、内藤知美、保育者の成長プロセスとリンクする現職教育・研修(第2報)ーコンサルテーションの役割、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第3号、2012、101-107

②田爪宏二、小泉裕子、保育者志願短期大学生における「保育者アイデンティティ」の確立を規定する要因の検討ー実習終了後における保育者のイメージおよび就業意識の調査からー、査読有、第29号、2012、11-20

③内藤知美、井戸ゆかり、保育者の成長プロセスとリンクする現職教育・研修ー現職教育・研修の動向についてー、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、第2号、2011

〔学会発表〕(計9件)

①内藤知美、井戸ゆかり、ファーストステー

ジ保育者の課題と現職教育(1)絵本の実践から、日本保育学会第66回大会、中村学園大学、2013

②小泉裕子ほか、プレ保育者アイデンティティの発達(1)、日本保育学会第66回大会、中村学園大学、2013

③内藤知美、小泉裕子、井戸ゆかりほか、シンポジウム「成長プロセスを踏まえた現職研修・教育を考えるーファースト・ステージ・クライシスを支えるためにー」、日本保育学会第65回大会、東京家政大学、2012

④小泉裕子ほか、自らの保育観の気付きーアクションリサーチを通してー、日本保育学会第65回大会、東京家政大学、2012

⑤内藤知美、井戸ゆかり、保育者の資質向上と現職教育(4)ー新任・初任段階に着目してー、日本保育学会第64回大会、玉川大学、2011

⑥内藤知美、井戸ゆかり、保育者の資質向上と現職教育(2)ー成長モデルとその要因の検討ー、日本保育学会第63回大会、松山東雲女子大学、2010

⑦井戸ゆかり、内藤知美、保育者の資質向上と現職教育(3)ーコンサルテーションの役割ー、日本保育学会第63回大会、松山東雲女子大学、2010

⑧井戸ゆかり、内藤知美、保育者の成長を支える現職教育(2)ーコンサルテーション事例からの検討ー、全国保育士養成協議会第49回大会、甲府富士屋ホテル、2010

⑨内藤知美、指導計画の作成と保育者の成長ー年間計画にみる保育の見通しの変化ー、日本乳幼児教育学会第20回大会、関西学院大学、2010

〔図書〕(計1件)

井戸ゆかり編著、保育の心理学Ⅱ、萌文書林、2012、218頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

内藤 知美 (NAITO TOMOMI)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：10308330

(2)研究分担者

- 井戸 ゆかり (IDO YUKARI)
東京都市大学・人間科学部・教授
研究者番号：60331500
- 小泉 裕子 (KOIZUMI YUKO)
鎌倉女子大学・児童学部・教授
研究者番号：80310465
- 入江 礼子 (IRIE REIKO)
共立女子大学・家政学部・教授
研究者番号：50288099